



大勢の胎児殺し

幹細胞研究における問題

白衣を身にまとった科学者たちが、実験中に何千ものいのちを滅ぼしていく。まるで映画「フランケンシュタイン」の世界だが、ZWE国立衛生研究所の方針次第では、そんな身の毛もよだつ光景が、今にも現実になりかねない。

物語は一九九三年にさかのぼる。レーガン・ブッシュ政権時代に施行されていた遺伝組織研究が出来ない法律にクリントン大統領は就任2日後、終止符を打った。彼は遺伝組織研究が科学の進歩とか、病気の人々を救済することになると考え、中絶女性が増加するだろうことにあまり興味がなかった。

しかし、議会はさまざまな問題が起こるのを承知の上で、95年、遺伝組織研究への公的資金援助を打ち切る法案を成立させた。

だが当然、個々人の研究まで止められはしなかった。98年12月には、私的資金援助をうける科学者たちは、研究室で人間の幹細胞を育てるまでに至った。幹細胞とはいわゆる『主細胞』で、身体の組織や器官をつくるのに使われる。実験材料はさまざまなのが考えられるが、最も効率がいいのは人間の胚、すなわち生まれる前の胎児

である。

一方、ZWEの科学者たちも幹細胞研究というゲームに再び興味を示していた。細胞の調査に対する公的資金援助は禁じられているが、胎児に関する規制はない、と法律をうまく逃れようとした。だが、ステファン・ホール氏によるニューヨークタイムズ紙の記事では、「人間の幹細胞を手に入れるには：(中略)：胎児を殺さねばならない」とある。ここに倫理的ジレンマが生じる。

受精卵利用ゴーサイン（日本）

個々人の中絶は、実験用の細胞を得る確実な手段である、と研究者たちは注目した。しかし、実際はそううまくいかない。中絶方法によつては、胎児が使いものにならない場合もあるし、研究者が胎児を手にした時にはもう細胞が死んでいて、実験対象になりえないこともある。

ZWEの科学者たちは、国全体で15万ともいわれる、体外受精のために用意され、必要とされず放置されたままの冷凍胎児にも興味津々

たいとしている。

不妊治療のため体外受精を行った後に余った受精卵の研究利用について、同学会は1985年に出した会告で、「生殖医学の発展」と「不妊症の診断」にかかわる研究だけに限っていた。

ところが近年、受精卵から作るES細胞を、心臓や神経の細胞に変化させて移植する再生医療研究が米国などで活発化。国内でも、こうした分野での受精卵の利用を求める声が高まっていった。

子宮に戻せば子供に成長する受精

である。胎児を母親の子宮に着床させれば我々と同じ男か女に成長するだろうが、研究室におかれたら：一体どうなるのか、考えただけでゾツとする！

十分な細胞を手に入れるために、ZWEは昨年12月に新たな指針を発表した。公的機関の科学者が中絶に関する私的資金援助を受けることを基本に、幹細胞調査に関しては公的資金援助も認めることになった。所詮、法律の周囲を逃げ回るごまかしである。国民生存権委員会のダグラス・ジョンソン氏は「胎児が解剖され殺される実験に、国家がスポンサーとなることにながる」と予見する。

チャールズ・コルソン

卵を研究に使うには、倫理面を含め慎重な扱いが必要のため、同学会は、受精卵の提供機関に対し研究計画の報告を求め、不適切な利用への対応も今後検討していく。

ES細胞研究では、すでに京都大の倫理委員会が、ES細胞を作り出す研究計画を国の指針に基づき承認。海外で作られたES細胞を使った研究は、信州大がすでに学内審査を終え国に申請しているほか、京都大や東京大なども準備を進めている。

2001年12月6日 読売新聞

神に聴こせ

一九七五年六月六日、私たちの五回目の結婚記念日でした。私たちは二人の愛らしい子ども、男の子と女の子に恵まれ、「完璧」な家族でした。物質的財産は豊富にありましたが、私たちは数多くの困難に立ち向かってきました。仕事に関わる別居、家族や友達との別離を引き起こした引越、二回の流産、そして何回かの病気の発作などです。私たちは夫婦として滅多に口論したり離婚を言及しませんでした。私たちがはよそよそしく互いに満たされることはありませんでした。

私たちは一つの屋根の下に二人の単独の人間として暮らし、成長よりも精神の安定を得ようとしていました。会話は上辺だけのもので、論争になりそうな話題を議論することを避けました。私たちは、他の多くの友人達のように離婚しなかったことから、自分たちの結婚を成功だと考えました。私たちの結婚はただ社会的な行事でした。

恐らく、私たちは結婚の宗教的な側面について、結婚前

の理解が不足していたのでしよう。「恋に落ち」その結果結婚が必然的に続いたのです。私たちの婚約は祝福と期待、そしてわずかな精神的な手のさしのべによつて特徴付けられました。人間の性、親としての役割、子ども間の養育に関するカトリック教の教えは、結婚前の段階で議論するにはあまりにも論争的だと見なされました。悲しいことに、私たちのカトリックの情報源のほとんどは地元一般紙の宗教面でした。

『フマネ・ヴィテ』(パウロ六世法王の人間の生命と出生の規定に関する予言的な回勅)は一九六八年に、世俗的な新聞に、時間と共におそらく変わるであろう「一人の意見」として出版されました。司祭のみならず俗人も混乱しました。私たちの司祭は家族計画に関する決断を下すときには「自分たちの良心に従いなさい」と助言してくれました。「自分たちの良心に従いなさい」という言葉は私たちのスローガンになりました。私たちに

とって、

この言葉は人工的な産児制限を正当化できる

ということを意味しました。つまり

大多数のカトリック教徒は人工避妊をし、自

然な家族計画は時代遅れになつて

いました。

私たちはまずグリがピルを服用することから始めました。私たちは、ピルが新しい生命への自由を排除したことによって、私たちの結婚のこの時期に、貞節さを維持することが思っていた以上に非常に挑戦的なことであることを知りませんでした。グリは妊娠できませんでした。私たちはお互いの誠実な会話に先立ち、性的快楽のために貞節さを喪失する大きな誘惑にかられました。

避妊期間中、私たちは生殖のための性交に携わっているとき、「行為」について心配しました。私たちは真実の愛が本当に意味するもの、相手のために与えることを見失っていました。私たちは気づくことさえなく、結婚における決定的な愛・生活の絆を破壊していったのです。私たちは私たちの関係の中で結合の部分だけを賞賛し、生殖的な部分を賞賛しなかったのです。

私たちがピルの利用を辞めて別の避妊の方法に移るまで、二回流産を経験しました。 Condom とフォームを短期間使いましたが、これらはあまりにもやっかいです。子宮内避妊具を使ったときには、母なる自然は即座に反応しました。感染により、グリは二ヶ月以内に二回の小さな手術を受けました。更に、私たちは子宮内避妊具が中

絶を引き起こす道具であることも知りませんでした。

賢明な忠告

グリがカトリック女性の黙想会に参加し、家族計画に関わる挫折感を小さな女性だけのグループと分かち合うようになったのは、この時期でした。優しい年老いた女性が神はよりよい方法を知っていらつしやると彼女に教えてくれました。カトリック教会は結婚の秘蹟を、結婚式の一日だけでなく、私たちの結婚生活の中で毎日実施されるものと見なしていると、彼女は説明しました。この友人は、性交という結婚の親密な行為の究極の表現が、夫婦と神との間の愛情に開放されているため、常に生命の伝達に向けて開放されているのだと教えてくれました。彼は愛は愛を引き起こすのです。彼女はまた、女性の自然生物学的な周期性を理解している夫婦は、その周期性を子どもを妊娠するために利用することができ、一方では新しい生命を創造することを差し控える充分な理由があるときには性交を避けるためにも使えるのだと説明しました。グリはジョン・シーラ・キップリー夫妻著の「自然な家族計画



産児制限を取り入れ、あやうく犠牲に

(NFP)の術」を一部借りてきて、その手段を試み始めました。

私たちは人工的な産児制限によって失った自由を取り戻すのに数ヶ月間奮闘しました。それは一、生殖に関わらないコミュニケーション(笑顔、キス、抱擁)を通じて毎日お互いを愛し合い、寝室での行為無くして真実の愛情と親交を深める自由、二、生殖力のあるときに関係を持つよう無意識的な決断をする身体的、感情的、心理的、そして精神的経験をする自由、三、ことごとく、完全に神の生殖力の賜



決定的なきずなが破壊されたときに、どうしたら夫婦はお互いを愛し合い続けられるでしょうか。

物を受け入れ、生命を創造したり遅らせたりする神の意志に従う自由です。

私たちの求愛はとても科学的且つ機械的な体験となりました。私たちが産児制限から自分たちを解放し、自制を学んだとき、それは「今日はあなたを昨日よりも愛しているけども、明日ほどは愛していない」と語る、人生の蜜月の始まりでした。産児制限は私たちの存在の最も親密な部分の神秘さを奪い取りました。私たちは相互の創造者というよりも、自分の意志でお互いを利用する操縦者となっていました。避妊具を使うことによって、私たちは私たちの欲望の奴隷になっただけで、その副作用は恐ろしく、また私たちの関係は人間的なものでした。私たちは自分自身に二つの質問をすることに怠りませんでした。

より良い方法

結婚の秘蹟で神と交わした契約について正しく理解していなかった私たちは、神の行為を行うことにあまり乗り気ではなく、

私たちはお互いをもう少しで失うところでした。

恐らく、私たちの問題の一部は、カトリックの教えを自分たちの都合に合わせて変更したことです。私たちの司祭が、結婚の準備の段階で私たちにするように求めた真の決断について、私たちは理解していなかったのです。それは単に人工的な産児制限を使うか否かの決断ではなく、教会の導きを私たちの決断に関わりを持たせるか否かの選択でした。『フマネ・ヴィテ』の中でパウロ六世法王は、私たちに新しい生命の創造に関わる決断をするときには正しい情報を持つた良心に従うように述べています。何て威厳ある決断でしょう！私たちはもしそれが可能ならば、家や車の購入といった世俗的な出来事に関わる決断はとも些細なものになっただけで感じました。

もし十分な理由が存在しないのであれば、夫婦はその結果が子どもを創造へとつながる可能性を知りながら、お互いの愛情に身を委ねるのです。何て有力な選択肢なのでしょう！

姿勢の変化

性交は実に特権です。それは結婚の契約に伴って得られるものです。私たちが結婚についての神の教えを完全に受け入れたとき、私たちの二人の子どもに対する姿勢が劇的に変化しました。私たちは二人が実にかつ、妻、そして神との間の最も親密な愛情の目に見える印である賜物であることを発見しました。私たちはもつと子どもが欲しいという自然の欲求を持ち、私たちの家族は段々大きくなっていきま

した。カトリック教会がなぜ人工的な家族計画に反対するのか、という永続的な疑問に対する答えは、あまりにも明白だと私たちは思います。それは、身体的、心理的、感情的、そして精神的に私たちが傷付けます。教会が反対するのは、私たちに永久的な損傷を与えるからだけではなく、性交の行為から妊娠の可能性を人為的に取り除くからです。NFPは良い結婚の保険です。それは頑丈な家族の土台を築く本

物の岩なのです。統計はこのNFPの結婚確立の側面を支持しています。家族計画の自然な形態を実施する夫婦は、2%以下の離婚率となっています。

私たちの神は異なる方法で私たちに語りかけてくれます。私たちは聴くことを学ばなければなりません。幸い、私たちの神には忍耐力があります。私たちは神を讃え、私たちの生殖力について神に感謝します。神の名を私たちの家族の間で讃えんことを！

ボブ、ゲリ・ラード夫妻

『沈黙の叫びを見て』

女性に生まれた以上

自然に胎児が流産してしまう場合は仕方ないけど人工的にするのはいけないことだと思いませんか。女性は中絶する、しないと、選べる権利があるけれど胎児にはその権利がありません。胎児には、これから先の人生が待っているのです。男性には産みたくても産めないのです。女性に生まれた以上女性にしかできないことを人の手で駄目にしてはいけないと思います。

Y・Rさん(高三生)



教えに忠実すぎる?

なんだかおかしいなタイトルですよね。中絶医の言う事を読んだり聞いたりするにつれ、あるパターンが彼らの話に見えてきます。中絶に対する考え方を間違った方向に導いていることの一つに、体に起こることを無視して、精神面ばかりを述べたてていることがあります。

このことは、ある女性が中絶前に私に言ったことにもはつきり証明されていました。彼女はこう言ったのです。神様が与えてくださった子どもだけども、まだ子どもを持つ準備が出来ていないから、神様にお返しするんです。いかにも神様に忠実であるが如くに聞こえるではありませんか！まるで正しいことを言っているかのようです！でもこの場合、子どもにとって本当によい場所は、神のいる場所だったのでしょうか。彼女の言葉は、疑いなくある重大な事実をつましく回避したものです。その子どもが殺害されるといふ事実を。彼女の精神と同じように精神を持っていく子どもが、切り刻まれ棄て去られようとしているという事実を。キリスト教の教えを語るのに、こういっ

た事実を無視したり避けることはすべきではありません。

同じような考え方が、以下に紹介する中絶医ノーマン・マシウズの言葉にも表れています。彼が、シンシナティのプロ・ライフ 同人雑誌の質問に答えたものです。

問：中絶手術をする時、一人の人間のいのちを抹殺しているという意識がありますか。それはどうしてですか。

答：わかりません。いつ頃から胎児を人間として扱うべきかわからないのです。誰も知らないと思います。

問：高度な教育と訓練を受けた医師として、人のいのちはいつから始まると思いますか。

答：正直に言って、わかりません。問：もし、患者さんが胎児について、「これは赤ん坊ですか」と聞いたら、どう答えますか。

答：患者はそんなこと聞いたりしません。もし聞かれても、子どもがいつ精神を授かるか、つまり人間として扱いはじめられるのかからないと答えます。

中絶を否定するカトリックの教えは、精神のある、なしに基づ

いているわけではありません。真の教えは、神の力は人間よりも偉大であるべきだということです。ローマ法王が『いのちの福音』No.60で言っているように。

妊娠が判明しても一定の日数がたつまでは、一人の人間のいのちとはまだ見なすことはできないと主張することによって、人工妊娠中絶を正当化しようとする人がいます。しかし実は、「卵子が受精した瞬間から、父親や母親のそれとは異なる一つの新しいいのちが始まるのです。それは、自分自身の成長を遂げるもう一人の人間のいのちです。受精の時にすでに人間となるのでなければ、その後において人間となる機会はありません。人間となる機会はないのでしよう。この不変かつ明白な事実は、現代遺伝学の成果によって裏づけられています。すなわち、現代遺伝学によれば受胎の瞬間から、受精卵の中にはその生命体が将来何になるのかというプログラムが組み込まれていることが証明されたのです。それはつまり、受精卵は一人の人間、しかも特定の特徴をすでに備えた一人の個人となるという

ことを意味するのです。受胎のときから人間のいのちは冒険を始めますが、それが持つさまざまな偉大な能力は、発揮されるまでに時間がかかるのです」。いつ靈魂が宿るかということは、経験的データでは示すことはできませんが、受精卵についての科学的な研究の結論は、重要な示唆を与えているといえます。「それを踏まえたくて理性に基づいて考えるならば、われわれは、人間のいのちが初めに現れた瞬間から、そこに一つの人格の存在を見いだすことができる」のです。さらに、問題となっていることは非常に重要なので、道徳上の義務の立場からいって、人間の胚芽の殺害を目的とするいかなる介入をも絶対的に明確に禁じることが正当であるためには、一人の人間にかかわることであるという蓋然性さえあれば十分です。まさにこのような理由から、あらゆる科学的討議や哲学的論証―教導職はその立場に立つと明言してはいませんが―とは別に、教会はいつもこう教えてきましたし、教え続けています。すなわち、人間の生殖活動によって生存を始めたものは、その最初の瞬間から、男性あるいは女性の全体性、および体と霊としての一体性において、倫理的に人間になるはずのものであることへの無条件の畏敬が保障されなければならないということなのです。「人間は、受胎の瞬間から人間として尊重され、扱われるべきです。そして、その同じ瞬間から人間としての権利、とりわけ罪のない人間だれにでも備わっている不可侵の権利が認められなければならない」のです。

フランク・パボーン

自分を許す

中絶手術に関係した人の多くは、最終的に、罪を許してもらいたいと感じるようになります。しかし、神の許しを受け入れることはできても、自分で自分を許すことができないという悩みをよく耳にします。

もし、あなたが神の許しを受け入れていないのなら、まずそれを受け入れて下さい。神に許されていると感じながらも、自分自身を許すことができないで悩んでいるのなら、この文章の続きを読んで下さい。

聖書のヨハネの第一の手紙
三：19〜20にこうあります。

「それによって、私たちは、自分

(5ページへ)

神の意図するセックスとは

1. セックスは素晴らしいもの

神が創造したセックスは素晴らしいものである。神はその素晴らしい行為を人間に与え、使い方を説明してくれている。

聖書でもセックスはよきものとされている。ただし、乱用は認められていない。同性愛・婚前交渉・マスタベーションなどはあるまじき行為である。神の法則に従う事が幸福への近道

神の意志に背けば、社会の秩序が乱れ、不幸を招く。

生殖器を介するセックスだけが愛情表現の手段ではなく、様々な方法で男らしさ女らしさを表現できる。

神は人間を男と女に創り出された。そしてそれをよしとして満足された。

2. セックスは夫婦間の営み、一体の証である。

神はセックスを、生涯信頼を誓いあった一組の男女のための行為と考える。セックスは神から夫婦への贈り物である。その包みを結婚前に開いてはいけない。

肉体的結合は夫婦が完全に一体となった証、かつ喜びの表現である。

神の力を借りれば性欲も制御できる。

未婚者はセックス以外の手段で愛情表現することができる。

真の潔癖さとは性行為を抑制するのみならず、配偶者以外に性欲を抱かないことである。

3. セックスは完全なるもの

生殖という究極の共同作業は、結婚生活のみにおいて行われるべきである。

男女が一心同体となる生殖は、愛情表現・子孫繁栄の両方の目的を持つ。どちらが欠けてもいけない。

人工的避妊は、新しい生命を消しかねないあるまじき行為である。

家族計画は自然の成り行きにしたがって。どうしても避妊が必要ならば、粘液法や基礎体温計を利用し、危険日はセックスをしない。

性欲のはけ口としてではなく、相手を思いやり、行為の一つ一つに愛情を込めてセックスを。

生命と愛。それをとりまく創造・喜び・快楽・悦楽・興奮...神が結びつけたものを離してはいけない

姦淫は許されざる行為である。

1～3をふまえて、豊かな性生活を。

男女が生涯にわたってお互いを委ね合うのが、真の愛情であり、セックスはその確認のための行為である。愛情のかけらもなく、欲望のままに身体を合わせる、それはセックスとは呼べない。パウロⅡ世

セックスは素晴らしいもの。それには愛が必要です。その愛は結婚です。P-SEX-PN.JSW

(4ページから)

が真理についていることを知り、神のみまえに安んじられる。自分の心にとがめを感じるにしても、神は私たちの心よりも大きく、すべてのことを知りたもう。」

神はあなたのことをすべてご存じなのです。そして、中絶手術に関わったことについて(神の許しを受け入れた後でさえも)もしあなたの心が責めさいなまれているのなら、神はあなたの心より偉大であるということとを知らなければなりません。神の偉大さは、あなたの罪や恥のすべてをキリストの十字架の死によって償って下さったことから、明らかです。神はすでに、あなたのすべてを許して下さっているのですから、もうこれ以上そのことで苦しむのは神の望むところではないのです。神はあなたを愛し、永遠にその罪を取り除いたことを知ってほしいと望んでいらつしやいます。神はあなたの罪を忘れようとしてくださったのですから。

許しが奪われることはありませんが、強い罪悪感や恥を持たせ、そのために無気力になったり、ひどい場合には自暴自棄になったりするのです。

そこで私は、もしあなたが今も自分で自分を許すことができずにいるなら、再びイエスの力に頼ることを勧めます。あなたを苦しめている罪や恥の意識と、きっぱりと決別するので。神の許しを心から受け入れ、自らの罪悪感を本来あるべき場所である十字架のもとに返すのです。イエスの十字架の死は、あなたの罪を補って余りあるということを知り、自分で自分を許そうなどという無駄な努力はやめることです。なぜなら、そのような努力を続けることは、イエスのなさったことは偉大だが、十分ではなかったと言っているのと同じ事になるからです。

もちろん、そのようにしても、罪悪感に悩まされたり後悔したりすることがあるでしょう。そんな時は、やる気をなくしたり落胆するのではなく、その都度十字架のもとに悩みをお返ししましょう。

「あなたには私の恩寵で足りる。恩寵の力は弱さのうちに完成されるからである」(コリント人への第二の手紙 十二:9)

資 料 紹 介

ビデオ【410】

(社)日本PTA全国協議会推薦

ピル先進国 英国からの警告

ピルと環境ホルモン

28分 15,000円

現在の私たちのいのち、そしてこれから生まれようとしている次世代のいのちが脅かされています。それは避妊薬ピルとして、日本でも昨年解禁された薬のためです。

薬と言えば、人はいのちを守るものと当然考えられますが、避妊薬ピルについてはそうではありません。ピルの副作用として片付けるにはあまりにもひどい、ここにピル先進国と言われる英国の実情を伝えた一本のビデオがあります。

英国では約40年間、ピルは飲み続けられて来ました。そして、様々な問題が起こっています。ここで話されている専門家とピルの被害に合った人の言葉を少しお伝えしたいと思います。

まず、キャロライン・ベーコンさんの御両親は娘さんを16才で亡くされました。キャロラインさんは14才でピルを飲み始めました。両親に黙って…。娘さんの部屋でピルを見つけた母親は驚きましたが、自分もピルについてはあまり知識がなかったので、ただ、道徳的な面から娘さんに話して聞かせます。娘さんは「お医者さんに処方してもらっているから大丈夫」と答えています。そして、脳血栓で若いいのちを失いました。

そして、彼女の友人は「ピルの良いことは話してくれるけれど、危険性は誰も話してくれないことがわかった」と述べています。

日本でもピルは、特に日本家族計画協会を中心に広めようとしていて、何の知識も持たない10代はその餌

食にあいかなません。親も知識がないというのが現実でしょう。でも、ここに登場する英国人医師、マッガレット・ホワイトさんは述べています。「医師であれば、誰でも危ないことが分かるはずですよ」と。

子どもの選ぶ権利をたとえ親でも侵せないと知識人は言います。でもそれは、すべてのことを正直に、分かりやすく公表してからのことではないでしょうか。そして、私たち、大人もきちんと学習しなければ、次の世代に伝えていけないのです。このビデオで、ピルの真実を学習しましょう。4月号でもこのビデオについてももう少し紹介したいと思います。

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文 無料 + 郵送料

【カラー・パンフレット】

[201] 生か死 + 郵送料
 [202] 第二の処女 + 郵送料
 [203] デート + 郵送料
 [204] どうするの? + 郵送料
 [205] "NO"という技術 + 郵送料
 [206] テイーンの出産コントロール + 郵送料
 [207] パージンの瀬戸際 + 郵送料
 [208] していましたか + 郵送料
 [209] 親権限と「10代の性」 + 郵送料
 [210] 貞節のすすめ + 郵送料
 [211] 中絶行為は女性を解放しない + 郵送料

【ポケット・サイズ】

[301] 若い生命「1セット=カード+人形」30円 + 郵送料
 [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン200円 + 郵送料
 [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス500円 + 郵送料
 [305] 胎児の人権宣言カード30枚=100円 + 郵送料
 [306] ミニソフィア Ace エース(税別)7980円 + 郵送料

【ビデオ+本・日本語】

[401] 沈黙の叫び(VHS/Beta)7000 + 郵送料
 [403] ビリングス・メソッド(VHS/Beta)7000 + 郵送料
 [404] いのちーおくりもの(VHS)13000 + 郵送料
 [407] 命美しいもの = one&only(VHS)20000 + 郵送料
 [409] 聞こえる? 天使の鼓動(VHS)6000 + 郵送料
 [410] ピル先進国・英国からの警告 ...(VHS)15000 + 郵送料
 [411] (コース・セミナー) エイズ時代の性倫理 ...(VHS)3800 + 郵送料
 [500] (本) 生命問題に関する ... (カトリックの教訓)2987 + 郵送料
 [501] (本) 自然な家族計画 ... (ビリングス・メソッド)1000 + 郵送料
 [503] (本) プロ・ライフの旅300 + 郵送料
 [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ1200 + 郵送料
 [505] (本) いのちをみつめて500 + 郵送料
 [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ)660 + 郵送料
 [507] (本) 私の生命を奪わないで2300 + 郵送料
 [508] (本) いのちの福音1500 + 郵送料
 [509] (本) 小さき生命のために1300 + 郵送料
 [511] (本) 赤ちゃん: 最初の十ヶ月 ...12ページ ...100 + 郵送料
 [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて300 + 郵送料
 [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント500 + 郵送料
 [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう300 + 郵送料
 [515] (本) 経口避妊薬: ピル100 + 郵送料
 [516] (本) いのちの福音と教育1470 + 郵送料
 [517] (本) フマネ・ヴィテ300 + 郵送料

[511] 赤ちゃん: 最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬: ピル

注文: 1 - - - - - 5 1部 = ¥1000
 6 - - - - - 20 1部 = ¥75
 フルカラー 21 - - - 999 1部 = ¥50
 1000 - - 以上 1部 = ¥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

(本) フマネ・ヴィテ

1 - - 30 1部 = 250円
 31 - - 100 1部 = 200円
 101 - - 以上 1部 = 150円

パンフレット申し込み

1 - - 5 1部 = 35円
 6 - - 100 1部 = 25円
 101 - - 500 1部 = 20円
 501 - - 以上 1部 = 15円

は組み
 自由合
 でわす
 せ

十代の性

(22)

選択の自由

質問：私は16歳です。今、一対一の交際をするのは望ましいことでしょうか。もしNOなら何歳が望ましいのでしょうか？

デートを重ね、
親しくなったら？

Q&A

答え・・・一対一の交際の問題は、ひとりの人間と大半の時間を過ごしてしまいがちな点です。一対一でつきあううちに「ステディ」な関係になり、十代で幸せな結婚へと至る例もあります。でも、失敗して心痛やトラウマを抱えてしまう交際の方が大半です。ステディとは相手に対する献身の要素も多いからです。

十代のうちは学校も忙しく、献身への心の準備もその時間をつくるのも難しいものです。そ

ある聖書からの引用がきつかけで、私は「選択の自由」という言葉のより深い意味を考えるようになりまし。そして、自由の名のもとに人から生命を奪う残酷な選択をしている現実をなぜ人々は知らないのかが理解できました。シラの書(十五：11節) 20) エルサレム聖書にこうあります。

「私が罪を犯したのは、主のせいだ」と言つな、主は自分の嫌悪されることを行われるはずがない。「私を迷わせたのは主だ」と言う主には罪人が必要ではない。主は汚らわしい物をすべて憎まれるから、主を恐れる者で、汚らわしい物を好む人はいない。初め人間をつくられたのは主で、人間をその意志のままに任せられた。望みさえすれば掟を守れるから、主に忠実を守るのは可能なことだ。主は、あなたの前に火と水を置かれたのだから、望みどおりに手をのべよ。人間の前には生命と死がある。望みのままに、そのいずれかが与えられる。主の知恵は偉大で、全能で、すべてを見とおす。主の目は、主を恐れる人々の方に向けられていて、人間の望みをすべて知っている。主は、だれにも悪人になれと命じたことなく、だれにも罪を犯す許可を与えたまわぬ。

世の中には、選択という言葉の意味を正確に理解していないながら、神様が存在すること

も、私達を悪から守るためにモーゼの十戒があることも全く信じない人々が多くいます。先にあげた聖書の言葉をよく考えると、人には選択の自由！善悪の選択、火か水か、生か死かの選択の自由があることがわかります。しかし、自由の真実で不朽の意味はキリストにあることを、私達は知っています。「磔になつたキリストは、自由の本当の意味を表している。彼は、神からの贈り物としての自分の生涯を全うし、その自由を弟子たちと共に分かち合った」と、ヨハネ・パウロ二世はその著書『真実の輝き』の中で書いています。(第85番)

は、選択だけでなく、正しい選択は、その人だけ、社会全体を明るく照らす。

どんな人間も神のイメージと姿に似せて造られているのですから、私達妊娠中絶反対派は、いわゆる「選択の自由」を唱える人々のことを死を受け入れ、悪を選んだ人々と考えざるを得ま

せん。そして、中絶をしようが産後子どもを殴り殺そうが自由だというのなら、そこで選ばれたのは生命における神の支配の拒否、つまり善の完全な拒否なのです。私達は、ある目的を達成することが政治上不可能であるとか、九十年代の現実に即していないなどという言葉を、強制的に受け入れ、黙認させられることがあつてはなりません。当然のことながら私達の言い分は人々を不快にしますが、好意的に受け取られようとそうでなかつと、真実は常に真実なのです。私達は人々ひとりひとりに思い起こさせなければなりません。多くの社会問題はすべてたつた一つの事実の端を発している。人間には選択の自由が与えられているが、あまりにも多くの人がま



日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0062

高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 088-873-3619
e-mail: prolife@i-kochi.or.jp
http://www.japan-lifeissues.net

事務所時間：

月一金 10:00 - 17:00
土曜日 休み
日曜日 休み

For English Speaking People /evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

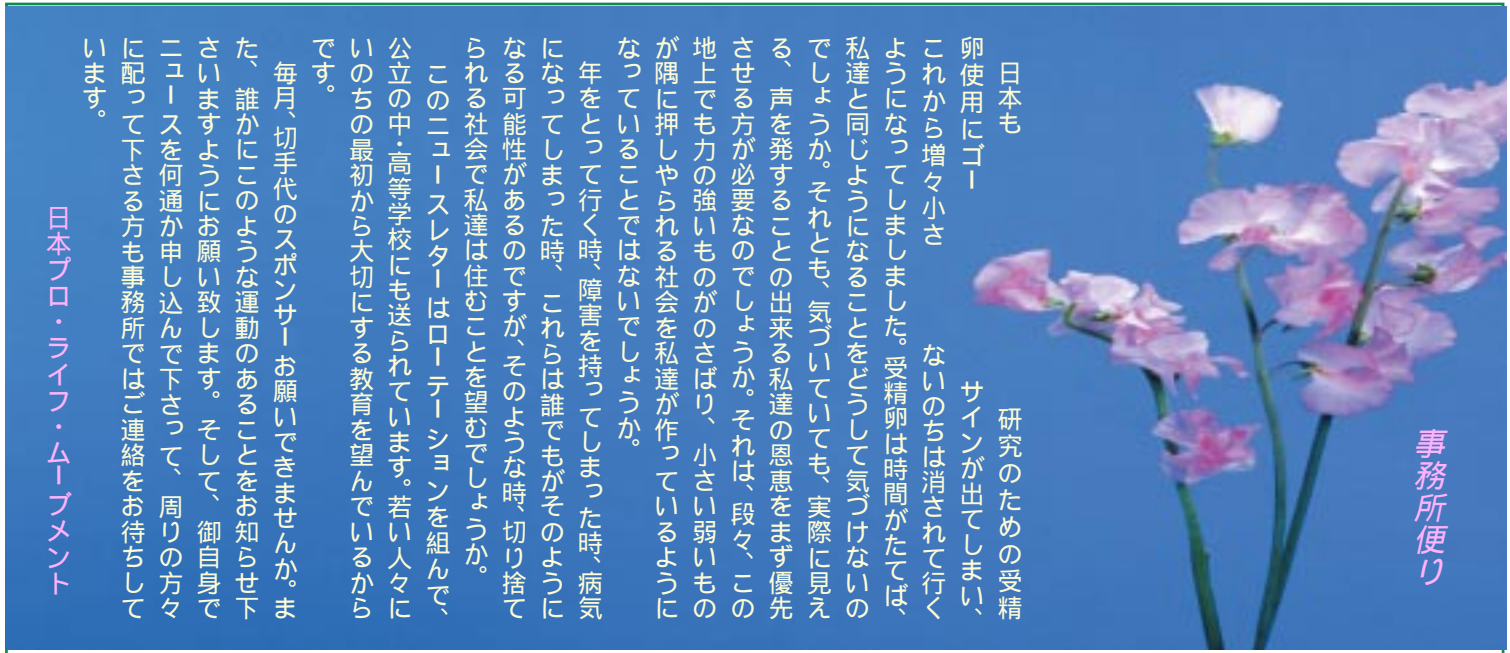
一万円 五千円 一千円

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

御送金

銀行：四国銀行朝倉支店
口座番号：0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント
郵便局：「郵便振替」
現在口座番号：01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント



事務所便り

日本も

卵使用にゴー

これから増々小さ

研究のための受精

サインが出てしまい、

私達と同じようになることをどつて気づけないのでしょうか。それとも、気づいていても、実際に見えさせる方が必要なのでしょうか。それは、段々、この地上でも力の強いものがのさばり、小さい弱いものが隅に押しやられる社会を私達が作っているようになっていくことではないでしょうか。

年をとって行く時、障害を持ってしまった時、病気になってしまった時、これらは誰でもがそのようになる可能性があるのですが、そのような時、切り捨てられる社会で私達は住むことを望むでしょうか。

このニュースレターはローテーションを組んで、公立の中・高等学校にも送られています。若い人々にいのちの最初から大切にすることを望んでいるからです。

毎月、切手代のスポンサーをお願いできませんか。また、誰かにこのような運動のあることをお知らせ下さいますようお願い致します。そして、御自身でニュースを何通か申し込んで下さって、周りの方々に配って下さる方も事務所ではご連絡をお待ちしています。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

(7ページから)

ちがった選択をしている、ということに。

今日では、献身よりも個人の自立を、自己犠牲よりも個人の満足を、不快なことよりも個人の快楽を大切にすることを、あまりに多くの人が従っています。確かに、他人のために骨を折らないでよいのは楽でしょう。けれども上記のシラの書の言葉をよく考えると、真に永遠の幸福を求めるといことは、他人を排除して自分だけの快楽と興味を追求することではないということがはっきりとわかります。

ですから、「選択の自由」という言葉は本当に自己中心的な言葉です。愛のない、残酷な言葉なのです。ある人の自由が行使される時必ず誰かが火が水かはたまた生か死かの選択をする自由を奪われるという明らかな事実を無視しているからです。

ジュディ・ブラウン

人間性

赤ん坊の死ぬ前に麻酔をかけるというあるイギリス人医師の勧めは、至る所で支持を得ている。ここカナダでは、ブリティッシュ・コロンビア大学の研究員であり心理学の教授でもあるケン・クレイグ氏が、バンクーバー・プロウイングス紙に対して、「グロバー氏の『生存可能な』いのちが始まる時点につ

いて、日にちについてはそうではないが、全体的な前提については同意している。」と語っている。

彼は胎内の赤ん坊の被る苦痛について研究しており、「赤ん坊たちが苦痛を実際に経験している。我々は赤ん坊たちに対して、疑わしい点を有利に解釈してあげる必要がある。妊娠24〜25週で、胎児は子どもや大人と同じ心理的及び行動的反応を示す。」と語っている。また、デイリー・テレグラフ紙は、「英国で最も著名な神経学者であるスーザン・グリーンフィールド教授が、中絶によって不当な苦痛をつける胎児がいるという懸念を述べている。」ことを報じた。しかし、「英国内のプロ・ライフ団体は、胎児が苦痛を受けないように直前に麻酔をかけるべきだとする医療専門家たちは大事な点を見落としている、と語っている。」とコンサーバティブ・ニュース・サービスは伝えている。「医学の専門家たちが、特に子どものいのちを初めとして、治療や人のいのちを守るといった基本的な責任から逃れる手助けをするようなことは、いかなるものであれ、嘆かなければならぬ。」と、英国最大のプロ・ライフ団体、ライフは主張する。だが、麻酔に関する議論は、うまくいけば社会を自己満足から解放し、中絶が本物の人間を殺しているという事実に向面させるいいきっかけになると期待している。

(ライフ：妊娠中絶合法化反対団体)

